

確認し、その結果、十分に機能している結果が得られた。

しかし、この状況に甘んじて西門から城壁線に沿って流下する雨水を、全て第0水門で受けるのは危険であると考え、平成15年度には第0水門の手前で水道を変更し、第1水門の貯水池へと導水している。管理上の問題点としては、土砂の流入を最小限に留めつつ捨石や裏込石の目詰まりを防止する必要がある。

第2節 第1水門貯水池の確認調査

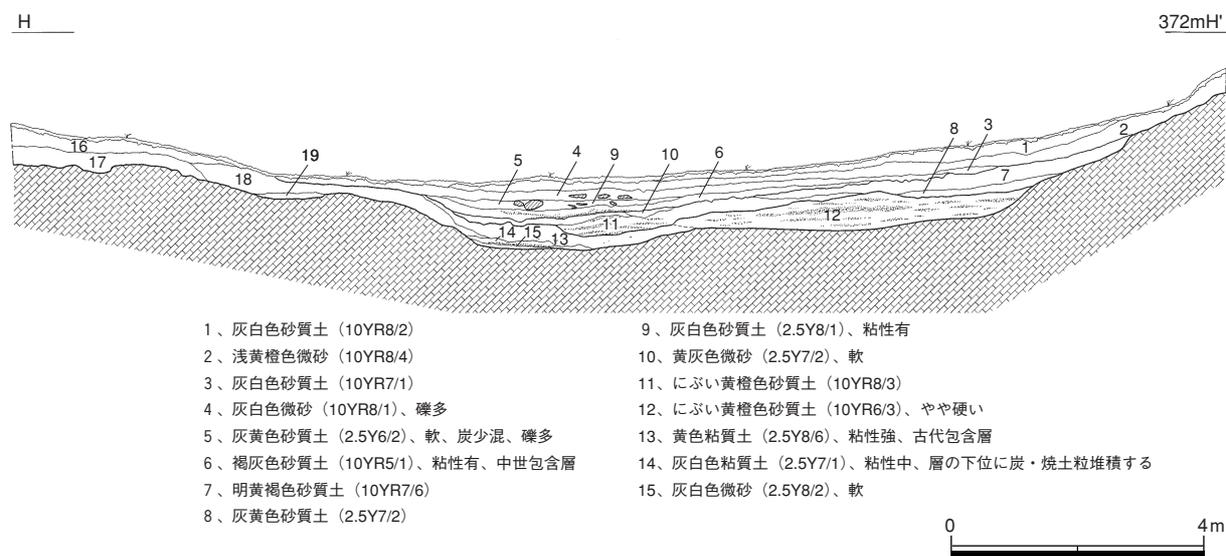
1、調査前の状況（第10図版）

第1水門の貯水池は、第0水門から北東へ約35m離れた城内側に位置する。鬼城山山頂から続く南側の斜面は、当該箇所傾斜変換し南東方向の尾根へゆるやかに連続している。地形が大きく変化するこの傾斜変換点には、第1水門方面から入り込んだ谷の谷頭と近接して貯水池が設けられている。貯水池の現況は瓢箪形を呈した窪地であり、堆積土により埋没しているため常態的に滞水していなかった。

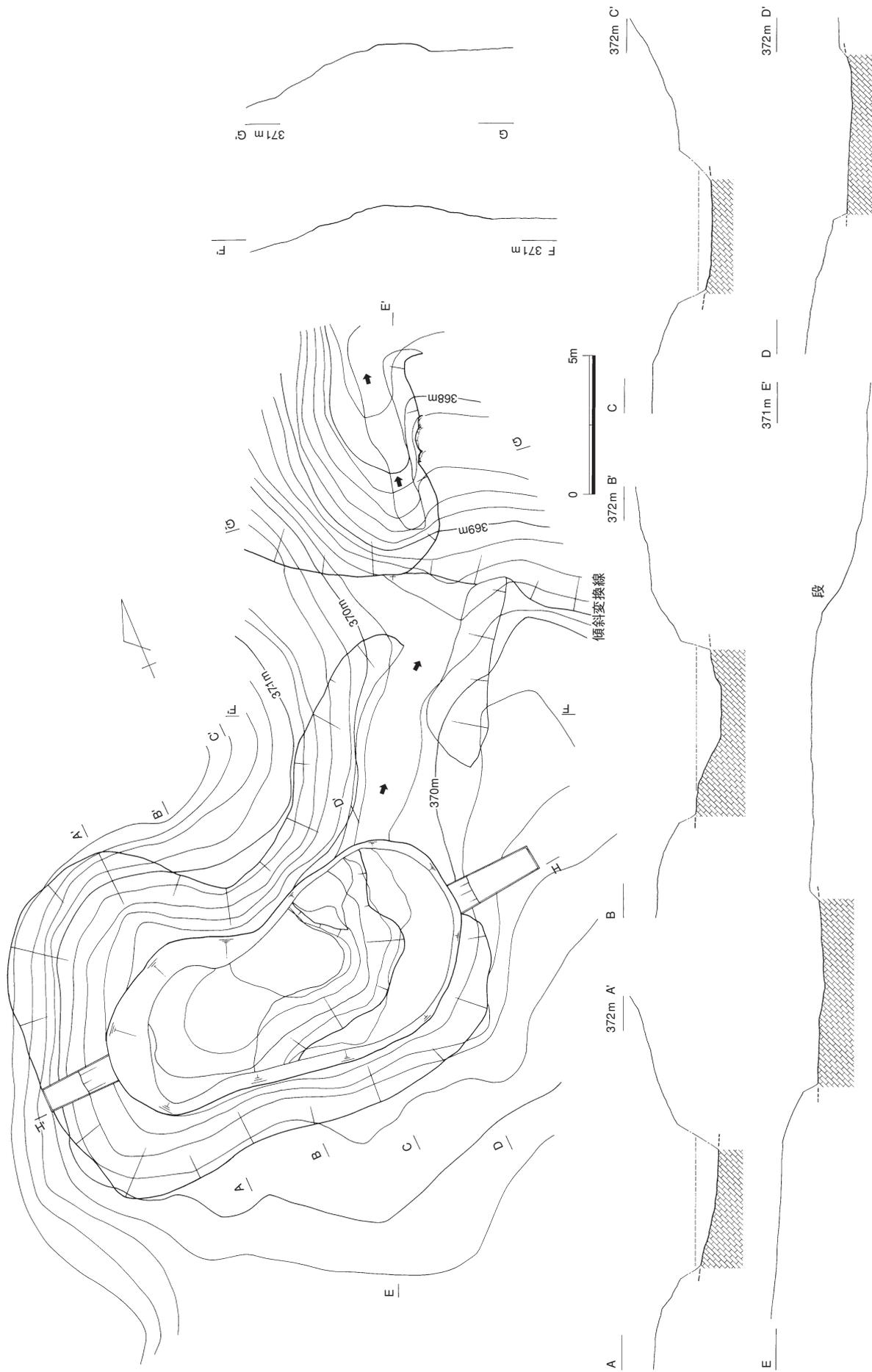
鬼ノ城では貯水池に付属する一連の遺構として堤防跡があり、第2水門～第5水門に通じる谷部に所在する。各貯水池には一方の谷をせきとめて堤防を築いているのであるが、特に平成11年度に岡山県古代吉備文化財センターが実施した城内の確認調査では、第5水門に付属する堤防の確認調査が行われ、壁面を石垣積みとし、その前面に敷石を並べた遺構が検出され、認識を新たにしたところである。しかし、第1水門の貯水池は他に比して貯水面積が小規模なためか堤防跡は確認できていない。

2、層序（第25図）

今回の調査は、不明な点が多い貯水池を対象として確認調査を実施した。調査は瓢箪形となる貯水池の長軸方向にトレンチを設定し、層序を確認後、順次拡張を行うことにした。



第25図 第1水門貯水池 断面図 (S=1/120)



第26図 第1水門貯水池 平・断面図 (S=1/200)

まず、第25図の断面図をもとに地山の形状をみると、トレンチの西端と東側に貯水池の肩を検出し、斜面はなだらかに下降していることが判る。底部は平坦に削平され、東側が浅く掘り窪められて最深部となっていた。

次に埋土は、最深部の下層に14・15層が堆積しており、14層の下位には炭小片と焼土粒を包含していた。そのため、トレンチ拡張後の平面検出では、最深部のくぼみを中心として楕円形にひろがった炭粒を確認したが、何らかの遺物ではなく流れ込みと判断した。

18層の堆積後、厚さ25cmを測る13層中から古代の土師器甕が出土した。13・14層は粘質土であり、貯水池の滞水状況を示すのに対し、11・12層は層厚30～60cmを測る砂質土で、しかも微砂や細砂が流状に含まれているなど、西側斜面からの堆積が非常に速く進行した事を示している。

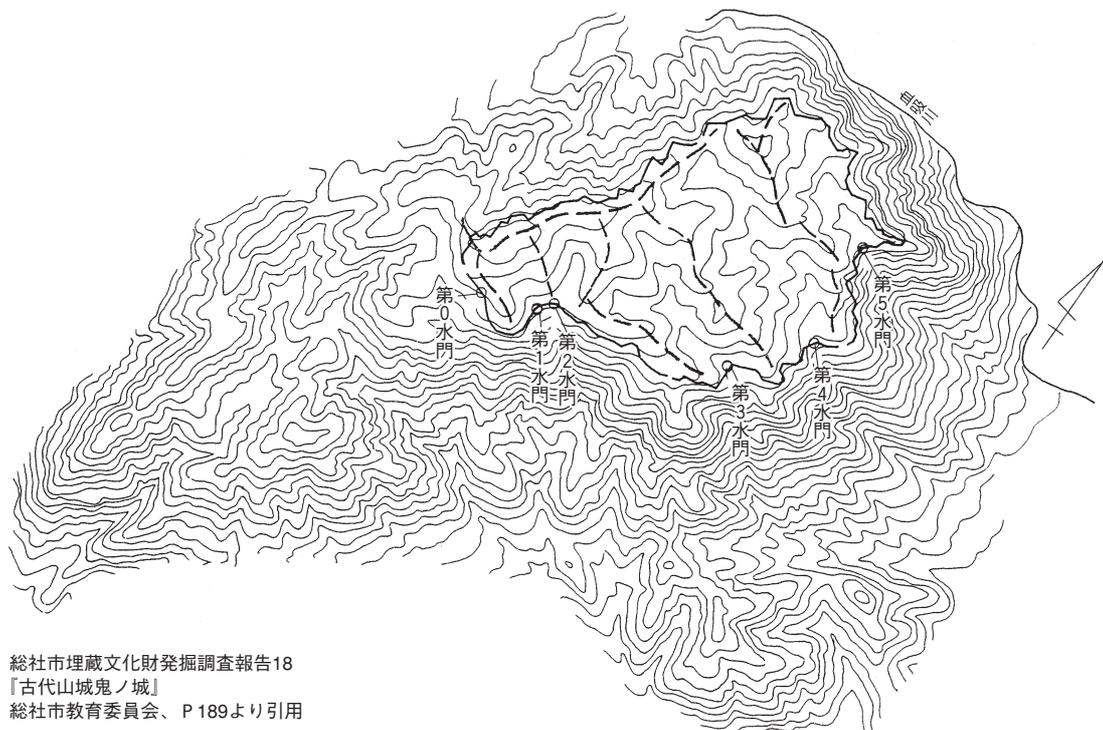
そして、埋土のほぼ中間に位置する6層中から吉備系土師器椀が出土したことにより、13世紀にはほぼ完全に埋没したことが判明し、その後の堆積を示す4・5層中には、土砂の流入に伴う礫が多数含まれていた。

以上の堆積状況を確認した上で、貯水池の低位部分にトレンチを拡張した。

3、第1水門貯水池（第26図参照）

貯水池の規模は長さ12.5m、幅4m以上、深さ約1mを測り、現況での体積は24.7m³である。貯水池の東半は、地山を掘り窪めた不整なU字形の肩を検出し、底部までの深さは約1mを測る。西半はトレンチ内に貯水池の肩を検出しているのみであるが、底部は平坦に削平されており、西に向かって徐々に高くなる状況を確認した。

調査前の貯水池は瓢箪形を呈していたが、調査の結果、中央部分の北側斜面に舌状に張り出した地



総社市埋蔵文化財発掘調査報告18
『古代山城鬼ノ城』
総社市教育委員会、P189より引用

第27図 鬼ノ城流域面積図

形が堆積土と判断されるため、さらに北東方向へ広がる可能性がある。

貯水池の排水方法については流路跡を未検出のため、周辺地形の観察事項を述べておきたい。まず、貯水池北東部の肩が2段となり高さに変化がみられ、この部分が最も谷頭と接近することから排水方向を示すと推測できる。次に、貯水池から北側には幅2m程の水道が長さ9.5m続いた後に、高さ1m程の段差が生じている。この段差は谷頭となる傾斜変換点でもあり、北側へ長さ7mほど直線的にのび、さらに一転して東へ方向を変え第1水門へ至る。第26図E断面のとおり、段となる形状が堤防の役割を果たしたと考えられ、貯水池からオーバーフローした水を越流させたのであろう。

4、小結

鬼城山の地形を俯瞰すると、背面側となる南西から北に延びる尾根が相対的に高く、主分水界をなしている。そのため、吉備高原に向かい合う北西側の城壁線には、水門を築くほどの大規模な谷部は入り込んでおらず、むしろ防御正面の南・東側に大規模な谷部が5ヵ所存在する。村上幸雄氏の研究成果によれば、主分水界から南と東へ派生する各尾根の稜線を繋ぎ合わせると、各水門の受け持つ受水面積が推測でき、受水面積と貯水池の規模による差が水門の排水方法に反映されていると指摘されている。第27図をもとに比較すれば、第0・第1水門の受水面積が他の第2～5水門に比べ極端に少なく、第1水門の貯水池も小規模であることから、水門には水口（排水溝）がなく、水門石垣の基底より排水させているのに対し、第2水門～第5水門は直接排水すべく、水門石垣の上位に排水溝が備え付けられている⁽³⁾。

また、城壁線より城内側の遺構には、西門の南東側に山の斜面をU字形に掘り窪めた土取場があり、貯水池より南東に広がる平坦面は、版築盛土の土取採取時に生じた削平地の可能性もある。こうした城壁際の周辺地形が、土砂採掘による地形の改変を受けやすい環境にある中で、貯水池の採掘時に生じた土砂も例にもれず、版築盛土などに使用されたと想定できよう⁽⁴⁾。

第3節 土塁状遺構の確認調査

1、調査の経緯

鬼城山より北西側の山麓には、吉備高原と連なる犬墓山（標高443m）との間に長さ112m、幅約40mにおよぶ狭小な谷部が、南西から北東に向けて延びている。谷部には大きく分けて鬼城山、犬墓山、そして岩屋方面から流れ込む血吸川の支流が3筋あり、相対的に低位置となる谷部の北東端が合流地点となっている。この合流地点の南側と北側の山裾に、小高い土塁状の遺構が存在する。

1971年に鬼ノ城を発見された高橋護氏は、この土塁状遺構を発見当初から注目され、「鬼城山・築地山」の論考においていち早く紹介し、鬼城山整備委員会の席上でも鬼ノ城関連の遺構として、たびたび注意を喚起されている。また、近年の古代山城研究の進展に伴い、城外に築かれた防御施設（遮断城）についても認識が深まり、鬼ノ城においても例外ではなくなってきた。ここでは遺構の性格が土塁跡か、もしくは堤防跡の可能性があるのであるため、ひとまず土塁状遺構と仮称しておきたい。

土塁状遺構の現況は、まず、血吸川支流の小川に面して三角形を呈した遺構の断面が見え、南西側の山裾に向かって約20m延びている状況を確認したが、山裾斜面への取り付きは砂防石垣の構築により改変を受けて不明瞭になっていた。